

さきに筆者が『明代徭役制度の展開』を刊行した時、引用史料はすべて讀み下し文しか載せなかった。そのため、外國の研究者から何度か苦情を言われたことがあった。著者の今度の方式は、非常に結構である。但し、スペースが限られている場合は、この方式を採用することは困難であらう。

著者の長年にわたる明代徭役制度に關する研究成果が集大成されたことは、大變喜ばしいことである。著者の極めて創意にみちた説が隨處に展開されている。筆者にとつても、教えられる點が多々あった。今後、明代徭役制度の研究を志す學徒は、是非讀まなければならぬ貴重な文獻である。それのみでなく、明代社會經濟史、或いは政治史を研究している者にも、必ず一讀しておかねばならぬ文獻である。

なお、拙文の中で、著者の見解を充分に讀みとることができず、妄言を述べている箇所があつたとすれば、何とぞ御海容を願いたい。このようなすぐれた研究を出版された、著者若見宏氏に、衷心より敬意を表する次第である。

一九八六年五月 京都 同朋舎
A5版 三八〇頁 九五〇〇圓

許滌新・吳承明主編

中國資本主義發展史 第一卷

中國資本主義的萌芽

岸 本 美 緒

本書は、全四卷を豫定されている『中國資本主義發展史』（以下『發展史』と略す）の第一卷として一九八五年九月に出版された、總序・本文あわせて全七七三頁に及ぶ大冊である。『發展史』全四卷が體系性をもつ一つの書物として構想されているという點からすれば、本書は本來、全卷完結を待つて書評されるべきものかも知れない。しかし、後述する『發展史』編集事業の経緯から見ても、又、頗る充實した本卷の内容自體からしても、『發展史』は、今後中國の經濟史研究におけるスタンダードとしての位置を占めるものと豫想されるのであつて、各卷につき、扱われている各時期の専門研究者による十分な批評がなされることが望ましいともいえる。淺學の私には力に餘る書物ではあるが、概略の紹介に若干の率直な感想をつけ加えて、書評の責を塞ぐこととしたい。

本卷卷頭には、『發展史』全四卷に對する「總序」が附せられている。主編者の一人許滌新氏の執筆に係るもので、『發展史』の性格、特徴が大略次のように説明されている。

(1)『發展史』編纂の経緯。『發展史』編纂の任務は、一九六〇年周恩來によつて許氏に委託されたものである。その目的は「政治經濟學の中國化」即ち、歐米をモデルとして作られたマルクス經濟學

を中國資本主義經濟の實際狀況と結合させることであり、それはまた、社會主義改造が完成した當時において中國資本主義に對し「一箇の歴史的總括」を行なうということも意味していた。編纂執筆事業は當初、中央工商行政管理局と中國科學院（當時）經濟研究所のスタッフによって共同で進められ、文化大革命による中斷の後には、中國社會科學院經濟研究所を中心に、上海社會科學院及び南開大學の研究者の協力を得て行なわれた。

(2)『發展史』編纂の意義。その政治的意義は、現在社會主義建設の路線を正しく提起する上で、その歴史的前提をなす中國資本主義の發展度と特質とを正しく把握することが必要だ、という點にある。又その理論的意義は、發生から發展、滅亡までの全過程をたどった中國資本主義をその中國的特質において歴史的に總括することを通じ、政治經濟學の豐富化に寄與することである。

(3)『發展史』の扱う對象。①資本主義研究の三側面をなす、資本主義經濟、ブルジョア階級、資本主義イデオロギーの内、本『發展史』は經濟を主要な對象とし、階級人物、階級闘争、經濟思想といった政治史的・思想的側面については資本主義經濟發展との関連で部分的にとりあげるにとどめる。②從來の經濟史研究における生産關係偏重の傾向を是正し、『發展史』は、技術資料・統計資料を用いて生産力についても可能な限りの考察を行なう。③外國資本、官僚資本、民族資本の三者に關して、『發展史』は、それらの融合・相互依存の側面にかんがみ、いずれをも中國資本主義の一部として取り扱う。

(4)『發展史』的方法的特徴。①『發展史』はマルクス・レーニン主義及び毛澤東思想を指導思想とするが、それは、彼等の結論を墨

守することなく、史的唯物論の「立場・觀點・方法」を用い、中國の歴史事實そのものから結論を導き出すことを意味する。②歴史事實の分析（史）と理論的分析（論）との綜合に當り、『發展史』の敘述方法は、『資本論』の如き論理的構成をとらず、歴史の流れに即して斷定的に敘述し、若干の章において理論的まとめを行なう、という方法をとる。③本『發展史』では、可能な限り定量的分析を試みて、それにより問題を發見し、或は定性的結論を検證することにつとめる。

やや長い紹介となったが、以上「總序」には、中國資本主義に對する『發展史』の接近法が極めて明示的に示されているといえよう。即ち、具體的歴史事實に即した着實な分析の必要を強調する「實事求是」的基調とともに、本「總序」には、強い實踐的關心が一貫している。中國資本主義に對するその實踐的關心とは、階級闘争の場面に身を置いて、敵對者と同盟者とを區別し、敵の性格を解明・暴露していこうとする方向のものではない。それはむしろ、「中國資本主義は既にその全過程を經過した」（一頁）という認識の下に、その残した正負兩様の遺産を正確に把握し、今後の發展に役だてようとする、いわば遺産相續人としての實踐的關心であるといえようか。そこでは、資本主義發展の過程での對立抗爭も無論忽視されているわけではないけれども、本『發展史』の最大の關心の一つは、中國資本主義が全體として残した成果——「中國資本主義發展の水準」（二八頁）——にあると考えられるのであって、そのことは、生産力の重視、定量分析の活用、「中國資本主義」への外國資本の包含、といった諸特徴に、端的にあらわれているように思われる。

さて、本巻は、そうした一貫した方法を以て論述される『發展史』の第一巻であり、明代から一八四〇年までを取り扱う。本巻の研究史的背景をなすものは、表題からも察せられる如く、一九五〇年代半ば以降展開されてきた周知の「資本主義萌芽」論争である。

この論争の方法的基調を受けつぎ、本書の主力も、明清時代の農業、手工業諸業種における「資本主義萌芽」（以下、原則として「萌芽」と略す）の検証にそそがれる。しかし本書は、第一に「萌芽」の概念規定を始めとする理論面での枠組設定の周到さにおいて、第二に「萌芽」検証の實證過程における網羅性と緻密さにおいて、従来の論争の水準を越え、かつこれを集大成することを目ざしたものと言えよう。

本書の構成は以下の通りである。なお紙幅の節約のため適宜一括して示した。括弧内の人名は、凡例中に示されている分擔執筆者である。但し、分擔執筆者以外の署名ですでに發表されている部分もあり（例えば、第二章第二節、第四章第一節、第五節、のそれぞれ一部が吳承明氏の名前で發表済）、本書の執筆が極めて集團性の強いものであったことが推察される。

第一章 導論（吳承明）

第二章 明代後期資本主義萌芽の出現（汪士信）

第一節 明代農業生産力の發展和生産關係的演變

第二節 明代的商品流通和商人資本

第三節 官手工業的衰落和手工業中小商品生産的擴大

第四、第五節 蘇州・杭州絲織業、廣東佛山冶鐵和鐵器製造業中的資本主義萌芽

第三章 清代前中期農業中的資本主義萌芽（石奇、方卓芬）

第一節 清代農業生産力的發展和經濟作物的推廣

第二節 租佃關係和農村雇傭關係的變化

第三節 農業中的資本主義萌芽

第四章 清代前中期手工業中的資本主義萌芽（上）（方行、石奇、簡銳、汪士信）

第一節 商品流通的發展和會館・公所・行幫的興起

第二、七節 製茶・製煙・釀酒・榨油業、製糖業、江蘇・浙江絲織業、蘇松棉布加工業、造紙・印刷出版業、陝西木材採伐業中的資本主義萌芽

第五章 清代前中期手工業中的資本主義萌芽（下）（方卓芬、胡鐵文、簡銳、方行）

第一、七節 冶鐵・鑄鐵業、雲南銅礦業、山東博山和北京西部煤礦業、景德鎮製瓷業、四川井鹽業、河東池鹽・淮南海鹽業、上海沙船業中的資本主義萌芽

第六章 中國資本主義萌芽發展的遲緩及其歷史作用（方行）

第一節 中國資本主義萌芽發展遲緩的原因

第二節 中國資本主義萌芽的歷史作用

本書のもつ豊富な内容を適確に要約することは容易でないが、假に以下の三部分に分けて紹介することとしたい。(1)分析の基礎となる枠組を提供する第一章及び總括を行なう第六章。これらは總序の(4)の②にいう「論」に當る部分である。(2)「萌芽」の前提的條件をなす農業發展や商品流通に關する敘述。(3)各業種に即して「萌芽」検証を行なった部分。上掲の構成からも察せられる通り、この(3)の部分が頁數にして本書の半分強を占める。

(1) 従来の萌芽論争の紛糾は、事實認識の相違というよりむしろ、

「何を以て萌芽と見なすか」という定義の相違に多く歸せられるものであったといつてよい。本書第一章における「萌芽」定義は、「資本主義生産關係の發生過程」というものであり、それは一面では、廣義にすぎない定義——商業資本の蓄積や商品經濟の進展といった類の趨勢を以て直ちに「萌芽」と見なすが如き——を批判し「萌芽」が資本・賃労働關係という具體的な經濟實體として理解されるべきことを主張すると同時に、他面では狹義にすぎない定義——労働者の土地との未分離や行會等の存在を以て「萌芽」を否定するが如き——を批判してその過渡的性格を容認する、という兩面の含意をもつと考えられる。さらに「萌芽」は、一工場・一店舗の孤立的・一時的事例によつて論證しうるものではなく、少くともある地方のある業種において「萌芽」發生の歴史的條件が存在し、相當量の資本主義生産關係が存在し、かつそれが繼續性を持っていた、ということが證されて始めて「萌芽」の存在を言うことができる、とする。

さて、資本主義生産關係の核心をなすものは、自由な雇傭労働である。そうした雇傭労働を、古來中國に存在した雇傭労働と區別する指標として次の三點が擧げられている。①被雇傭者の基本的な人身的自由。伙計制、親身制、米分制、提成制、全家包工などの労働慣行の多くは、資本主義雇傭労働とは見なせない。逆に又、毎朝労働市で雇傭を待つが如き臨時性の強い労働者も、資本への依存度が低く無産者でないという點で、未だ資本主義雇傭労働とは言えない。②雇用者の「資本」としての性格。即ち、その經營が使用價值を目的とするものでなく商品生産を通じて價值の増殖を圖るものであったか、という點である。この觀點からすれば、自給目的の生産を行なう經營地主や貢納品を生産する官手工業の如きは「萌芽」の

範疇からはずされる。③同一資本に雇用される雇工の人数。本書では一般に、十人以上のものについてのみに考慮する、とする。以上三點の基準は、從來の資本主義萌芽論の中では、やや厳しい方に屬するように感じられる。而して手工業に關する資本主義萌芽の形式としては、マルクスの「二つの途」にならつて、商人の生産支配とマニファクチュア（以下、マニユと略す）とが擧げられている。なおその前者は、問屋制前貸制度のみならず「商人雇主制」即ち、主に農産品加工業などにおいて、商人がその商業資本的性格を保持したまま雇工生産するものを含む。

第一章末尾は、「萌芽」研究の意義について述べる。批判對象として、中國資本主義を外國からの移植に歸する「外因論」、及びそれと表裏をなすところの「停滯論」ないし「傳統均衡」「高水準均衡」の異、「超安定システム」等の靜態理論が取り上げられ、「萌芽」研究の意義は、「萌芽」と近代以降の中國資本主義發展との連續性を實證することを以て、これらの理論を反證するところにある、とする。

最終章（第六章）第一節は「萌芽」發展の遅れの原因を論ずる。中國の封建社會は一種の成熟した封建社會の典型（「變態封建制」ではない、との含意）であり、その經濟構造、上部構造の強固さに加えて大きな自己調整機能を持ち、その故に容易に瓦解しなかった、との基本認識の下に、以下四點を擧げる。興味深い論點を含むが、後にも觸れる豫定であるので簡単に列挙するにとどめたい。①小農業と家内手工業との牢固たる結合。その理由として、農業の集約化、人口壓力、小農經濟の經濟效率、の三點が擧げられる。②市場の狹隘性と自然經濟の優越。③地主・商人・高利貸の三位一體。土地

賣買の自由という中國封建制の特色は、地租・商業利潤・利息の相互轉化を通じて、支配層が最も有利な方法で蓄財することを可能にし、中國封建制に強大な生命力をもたらし、とする。④封建的上部構造の反動的作用。具體的には、重本抑末政策、官手工業と礦業政策、海外貿易禁止政策、賦稅收奪、等である。

續く第二節では、「萌芽」の歴史的作用として、①「萌芽」が、「私利・求富と個性解放」を肯定する黃宗義・顧炎武らの進歩的思想の背景となったこと、②「萌芽」はヨーロッパに見られた如き「市民運動」は生みださなかつたものの、景德鎮や蘇州の手工業労働者の賃金闘争のような「新型の雇工闘争」を生みだしたことを述べ、最後に③として、近代以降における「萌芽」の發展變化を概観するが、これは詳しくは第二巻で扱われるべき豫定の内容である。

(2) 「萌芽」の條件をなす農業と流通の問題。まず農業問題に關しては、①宋から清にかけて穀物生産量は約五倍に増大したが、宋から明までの増加は主に耕地面積の擴大によるものであり、明清間のそれは主に集約化と新作物導入によるものであった。②棉花・桑・蔗糖などの經濟作物の普及はみられたが、總耕地面積の一割を占めるにすぎず、需要上の限界のために清中期にはその發展は抑えられた。③土地所有狀況については、明清時代とも、王朝初期には自作農の比重が多く、次第に地主的土地所有が擴大する、というパターンを示す。佃農の隸屬性は次第に弱まり、地租形態も、分租から定額租へ、實物納から貨幣納へ、という變化が見られた、とする。以上農業面の分析は、主に、農業資本主義萌芽の條件を検討するものと位置づけられている。佃農の隸屬性の弱体化及び經濟作物の一定の普及というプラス條件を評價しつつも、地租形態の變化の緩慢さ、

農業生産力發展の遲滯が、「萌芽」發展の根本的障礙となった、とする。

さて、商品流通に關する本書の考察は、第一に、「萌芽」發展における「市場問題」を一つの重要な分析課題として提起した點で、第二に、國內市場の規模に關する定量的分析を試みた點で、本書の中で最も斬新な印象を与える部分である。第一章での理論的分析において、當時の市場は、①地方小市場（即ち定期市レベルの交易）、②都市市場、③區域市場（例えば「嶺南」「淮北」など、或は一省レベルの範圍の市場）、④全國市場或は海外市場、の四級に分類されている。これらの内、①は小生産者相互の使用價値の直接交換、②は封建的收奪物と農村製品との交換、を内容とするにすぎず、③での交易も地域的自給自足の補充物であり、いずれも自然經濟なし封建經濟を破壊し得るものではない、とする。それに對し、「萌芽」との關連において本書で一貫して重視されるのは④の遠隔地市場であり、主要商品の長距離交易ルートとその交易量などについて、力を入れた検討が行なわれている。

第四章第一節三「アヘン戰爭前の國內市場量の分析」は、本書における定量分析の試みの白眉である。穀物・棉花・棉布・生絲・絹織物・茶・鹽の七品目について、その商品量、價額、產出量中に占める商品量の比率、などが、一つ一つの數字に多大の勞力を投じつつ推計されているが、推計方法の詳細な説明は第二巻に待つところが多い。七品目の内、商品價額の多いものは、穀物（七品目合計の四二パーセント）、棉布（同二四パーセント）、鹽（同二五パーセント）であり、こうした數字から、當時の商品交換の主要部分が、穀物と布・鹽等工業品との交換であつたことが推論されている。その

他、商品流通に關連して、商人會館、工商業公所、雇工行幫といったギルド的組織について言及がなされている。例えば牙行などが一貫して否定的に評價されているのに對し、これら組織については、郷土主義的狹隘性といった一般的指摘はあるものの、各業種の中でそれらが果たした具體的役割に應じ、是々非々のに評價されているといつてよいであらう。

(3) 各業種における「萌芽」の検討は本書の中心部分をなすが、業種數にして十數種、頁數にして四百頁餘に及ぶ分析を羅列的に紹介することは、紙幅の面からも不可能であり、意味も少ないと思われるので、ここでは分析上の概略の特徴を述べると共に、特に興味深い問題をはらむと思われる數業種をとりあげて紹介することとした。

まず業種選擇の基準について見ると、その業種が中國經濟中に占める比重、或は經濟發展における戰略的重要性、といった點は原則的に捨象して、「萌芽」の存否を基準に、「萌芽」の存在する業種を網羅的にとりあげる、という方針であると見受けられる。その結果、日本で殆ど研究のない、冶鐵・鑄鐵業、造紙・印刷業、木材伐採業、炭礦業、井鹽業などに相當紙幅が割かれている。これら業種に關する本書の詳細な分析から、私は裨益されるところ多大であつた。

分析の方法上の特徴は、第一に、各業種につき、ほぼ統一された基準・手續を以て「萌芽」の檢證が行なわれているということである。即ち、まず當業種の技術水準と生産概況が述べられ、次いで經營形態が詳細に考察され、第一章で明示された基準にはば忠實に即して「萌芽」の存否とその程度とが判定される。しかし、第二に、

その敘述方法は必ずしも、マニュアル通りの機械的ふりわけ、といった單調な感觸のものではない。むしろ、各業種の個性的特徴といったものが一項ないし數項を費して述べられている。そこに多くの示唆的な内容が含まれているといつてよい。例えば、絲織業、銅礦業、製磁業における官營工業或は官の出資・規制の問題。棉紡織業における家内副業生産の優勢の問題。木材伐採業における山地という特殊條件の問題。製磁業における專業化の進行と職種別組織の問題。礦業や井鹽業における地主・投資者・經營者相互間の複雑な租佃・出資關係。端布業、礦業、井鹽業、製磁業など廣汎な業種に見られる「包工頭」(勞務請負)制度、等々。以下數業種をとりあげ、若干の感想をまじえつつ、その論點を紹介してみたい。

①四川井鹽業。分析された十數種の手工業の内、經營の資本主義的性格について最も高い評價が與えられていると思われるのは四川井鹽業であり、「我國の資本主義萌芽の中で最も完備したマニユファクチュアが出現した」(一〇頁)ものとされる。鹽井の開鑿、鹽水の汲み出しと輸送、竈による煎鹽など、大がかりで複雑な工程をもつ井鹽業は、礦業と同様、大規模雇工生産を必須の形態としたと同時に、他の礦業——例えば官の規制や礦脈の涸渇によつて衰退に向つた雲南銅礦業——と比較して、官の規制の弱さ、人口増に伴う需要増、深井掘鑿によつてより濃度の高い鹽水が得られたこと、などの幸運な狀況により清代を通じ順調に發展した、そのことが如上の評價を導いたものであらう。こうした大規模投資に關し興味深い點は、その複雑な資本關係である。例えば、地主と經營者との租地契約において、鑿井以前の租地については地主は押銀をとるのみであるが、井の完成後、地主は分班と稱して利益の配當を受ける。さ

らに、開墾中の鹽井や完成した井竈の租佃關係も、清代中期以降富榮鹽場において發展した。そこでは、原業主が租金を得て承租者に貸與するのみならず、承租者がさらに第三者に轉租するという形で、往々にして租佃關係が重層的に連なっていくのである。こうした複雑な租佃關係につき、本書の評價はほぼ肯定的である。即ち、それは、資金の餘っている者に對しては既成の生産手段を利用して鹽利を得る捷徑を開くと同時に、資金繰りに苦しむ經營者にとつては一部の井竈を出租してその租金で他の井竈を集中經營することをも可能にするものであり、小井戸のみならず資本雄厚の大戸も往々それに借りて成長したのである、と。しかし、こうした經營の移轉が、絶えずなく租佃關係を通じて行なわれ、それ故にこそ資金がスムーズに運用しうるといふ、こうした制度は、資本の集中固定でなく、むしろ分散流動を加速する方向に作用しないであらうか。そしてそれは、「萌芽」期の特徴たるにとどまらず、近代中國資本主義の一つの特徴ともいえるのではないだらうか。

②景德鎮磁器製造業。本業種について注目されているのは、その專業化の進展である。「その工種・職業區分の細かさは、恐らく各種手工業の冠であらう」(五六七頁)、と。ここでマニユの存在が認定され得るのは坯作(審入れの前の型作り)についてのみであり、燒窯・加彩に関わる多くの職種は、極めて專業的に分化した小規模經營として、景德鎮一帯に軒を並べていたのである。こうした狀況につき、本書では、專業化の事實を以て直接「萌芽」を結論する類の議論を批判し、次のように述べている。「ここでは社會的分業が工場内部的分業にとつてかわっている。……こうした專業化は一面では技術と効率を高めるが、一面では生産單位を分散零細化し、資

本主義關係の發生を妨害する」(五七二頁)、と。この指摘は正しいであらう。しかし、そうした專業化が「技術と効率を高める」ならば、資本主義關係發生に對するその阻碍作用を自明の惡とするには當らないのであつて、專業化こそが合理的な選擇ということにならないか。「我國に於ては場外分業の發達によつて場内分業は反つて簡單化するという狀況があつた」(二七頁)という第一章の鋭い指摘にもあるように、このことは中國資本主義全體の特質に關わる問題でもあり、單に資本主義關係の發展を阻む外在的要因として注目するにとどまらず、効率比較などの具體的檢討を通じて理解さるべき現象であるように思われる。

③陝西木材伐採業。木材伐採業において「萌芽」が見られた陝西中南部の山地は、清代特に中期に外省からの移民によつて開墾された新開地であり、白蓮教亂の發生地とも重なる、内地邊境ともいふべき地域である。分析の冒頭には次のようにある。「明代中葉以來、我國の資本主義萌芽は主に、生産と商業が比較的發達した江南と珠江デルタ一帯に出現した。陝西南部は經濟の遅れた山區であり、ここに新しい生産關係が出現したということ注目し値することである。普遍的法則は特殊な事物を通して表現されるものであり、往々にして若干の偶然的要素がその間に混入することを免れない」(四三三頁)。その「偶然的要素」として以下の分析において強調されているのは「喫飯問題の解決」である。即ち、第一に、移民による先進的水稻耕作技術の導入、第二に、トモロコンなどの耐旱高産作物の普及、第三に、山區での封建的收奪が比較的輕く農民の生産意欲が高かつたこと、これらによる陝西山區の農業生産の一定の發展が、「萌芽」發生の背景となつた、とするのである。一般

に手工業や經濟作物生産の發展が、「喫飯問題」即ち手工業従事者及び經濟作物生産者の食糧問題の解決なくしてありえないということとは正しいであろう。しかしそれは必要條件であつて十分條件ではない。そして、本書で扱われている「萌芽」の諸事例を見るならば、それらは必ずしも「生産と商業が比較的發達した江南・珠江デルタ」に集中してはいない。むしろ、「萌芽」の直接の條件は、それが限られた地域でのみ生産可能で従つて廣い市場をもち（礦業、製鹽業、木材業）、技術的に大量の資本或は多數の協業を必須とする（礦業、製鹽業、木材業、高級絹織業）といった業種自體の屬性により、多く歸せられるものであつて、一地域における生産と商業の發展がその地域における諸産業の全般的資本主義化を生み出すといったものではないように思われる。山區や中進地帯における「萌芽」の存在はむしろ普通の事態である——このことは、資本主義發展の論理において、どのように説明されるべきであらうか。

④ 江南デルタの棉紡織業。本書では一般に、「萌芽」の存在する業種のみをとりあげるといふ例になつてゐるが、棉業については、一部の加工業を除き「萌芽」が見られなかつたにも拘らず、當時の商品經濟における棉布の重要性にかんがみ、特に棉紡織業をとりあげて、そこに「萌芽」が見られなかつたこと及びその理由に紙面を割いている。その理由として挙げられてゐるのは、資本主義關係發生の前提となるべき紡績工程と織布工程との分離が行なわれてゐなかつたことであるが、さらにその理由として次のように述べられてゐる。即ち、紡績技術の遅れのために、棉花から布を作る勞働過程において紡績にあてられる勞働時間は織布の三倍であり、従つて一勞働日當りの紡紗の報酬は織布に比べて非常に低く、農民が紡紗に

特化することは不利益であつたので、紡・織が分化しなかつたのである、と。しかしこれは、理解しにくい説明である。棉花を布に加工する工程の中で、紡紗と織布とに要する社會的に必要な勞働時間が三對一ならば、紡紗によって附加される價值は織布のその三倍であり、従つてそれに見合う報酬が、競争を通じ本來與えられる筈ではないか。又、假に織布が紡紗に比べ有利であるとするなら、農民はなぜ賤い棉糸を買つて織布に特化しないのか。そして「紡が織に追いつかない」（三九〇頁）状況があるなら、なぜ棉糸價格は上昇しないのか。一勞働日當りの紡紗の報酬が織布のそれに劣るといふことは事實であらうが、それは「技術の遅れ」のためでなく、紡紗が老弱者にもできる簡單作業であつたという事情によるものではないだらうか。紡紗工程と織布工程とが未分離であつたとすれば、それは、未分離である方が家族内の各種勞働力の有効利用に適合的だつたからであり、技術の問題というよりむしろ、家族内の各種勞働力の組み合わせが緊要の意義をもつ小農經營の特質の問題に歸せられるものであらう。

以上、不十分ながら本書の内容を紹介してきた。繰り返し述べたように、本書の内容は單に「萌芽」が中國にもあつた、とひたすら意地を張る」（三二頁）類のものではない。「萌芽」發展の遅れやその理由についての本書の論述は周到である。しかしそれにも拘らず、本書の主眼が「萌芽」の檢證ということにあるために、「萌芽」發展を阻碍する諸要因は、外在的な所與の條件として、やや羅列的に記述されるにとどまつてゐるように思われる。それに對し、一讀者としての私の關心は、中國化された政治經濟學の體系において、これら中國經濟の個性的諸特質はどのように相互連關的に

位置づけられ、構造的に理解し得るのか、といった側面へと傾いている。このような私の關心から、本書に對する總括的感想を、以下二點にわたって述べたい。

(1) 「資本主義發展史」という本書の性格からして、本書の目的が、明清經濟のバランスのとれた概観ではなく、中國資本主義の起源を明清經濟の中に追求していくことにあることは明らかである。

しかし、資本主義の生産關係は、民國時代においてすら、廣汎な小生産の中での孤島の存在にすぎなかったものであり、況んや明清時代においてその比重はさらに微々たるものであった。とすれば、「萌芽」が再生産を行なうてゆく過程で、小農經濟、地主經濟といった舊經濟と廣く複雑な關わりをもたざるを得なかったことは自明であり、その關わり方といったものが一つの問題となるであらう。

因みに日本の經濟史研究においても、資本主義の起源を舊社會の中に遡って追求する、という問題意識は強力である。しかし、例えばその代表的論者たる大塚久雄氏の所論をみると、そこでは、資本主義の源流は、資本主義の經營形態そのものではなく、むしろ資本主義發生の母胎をなす分業關係のあり方（即ち局地的市場圈）の中に求められている。即ち、舊經濟と隔離された完結した再生産圈の所産として資本主義發展をとらえようとするところにこの理論モデルの特色があり、だからこそ、資本主義の起源を舊經濟といわば切り離した形で追求し、新・舊經濟の諸要素を對抗的な形で峻別することが可能になるのだと思われる。本書においてはそうではない。本書で扱う「萌芽」の中には相當に發展したマニユ形態を示すものもあるが、それが資本面においては多く前期的商業資本に依存し、原料・食料の供給を「封建的」小農經濟に仰いでいる、といった點

で舊經濟の諸要素と深く接合していることは、自明の前提となっているのである。文脈違いを承知で本書の語を援用すれば、「萌芽」と舊經濟とは、「相互に對立するとともに又依存しあう矛盾統一體」（總序一七頁）とも言えようか。

例えば、農民の家内副業的手工業生産が、その低價格によつて雇工生産と競争し、「萌芽」の發展を妨げた（六七八—九頁）、との指摘にしても、業種によつては確かにその通りであらうが、他の側面から考えるならば、小農經濟の同じ特質が、手工業原料及び食料の供給を安價にする要因として、「萌芽」發展にプラスの作用をなした、という關係も考えられるのではないだろうか。又、商品の販路という面から、「萌芽」企業の商品の消費者について考えてみよう。清代中期の全耕地の約七〇パーセントが地主に所有されていたという本書の指摘（二二〇頁）をもとに、そこにおいて收奪された穀物の一部（例えば三分の一）が他商品に對する需要としてあらわれるとして推算してみると、その地主需要の量は、優に、前述した「アヘン戦争前の國內市場量の分析」における穀物以外六品目の商品額總計に匹敵する。本書の市場論においては、都市市場の交易を封建的收奪物と農村製品との交換であるが故に進歩的意義をもたないものとするが、同様に「全國市場」における需要の相當部分が「封建的收奪」に由來するものであるとも想定できるのではないだろうか。當時の中國の商品經濟の循環過程について假にモデルをつくとすれば、それは小生産者相互の交換としては描きえず、收奪階層をその一環として組み込んで始めて現實味あるモデルといえるのではないだろうか。「萌芽」商品の内容を見ても、鹽などの大衆商品とを別として、絹織物、茶、砂糖、紙、書物、木材、磁器などの業

種が「封建階級」の消費なくして繁榮し得なかつたことは明らかであり、「封建經濟」の發展と「萌芽」發展とを單に對抗的にとらえることは出来ないと思われる。

以上、「萌芽」と舊經濟との構造的結合について若干の感想を述べた。これは、いわば共時的構造の中での「萌芽」の位置の問題であるが、次に、通時的發展過程の中での「萌芽」の位置について考えてみたい。

(2) 「資本主義萌芽」は、その出現した社會と時代についていえば、新しい先進的な生産關係であり、新生事物のもつ生命力をもっている。それは一旦生まれ出でたならば、不可抗の原因を除いては途中で夭折することなく、新しい方向へと向かつてゆく生産様式である」(六頁)という第一章の指摘は、資本主義へと向かう「萌芽」の内發的な力を強調している。しかし本書では、「萌芽」發展の論理的必然性については恐らくマルクスやレーニンの理論を自明の前提としている如くであり、獨目の説明を行なつてはいない。それでは、これら經典作家——例えばレーニン——において、舊社會の中から資本主義が成長してくる必然性はどのように説明されていたのだろうか。私見によれば、それは以下の二つの論點に集約されると思われる。第一は、資本主義的經營は勞働生産性上の優位によつて競争を通じて小經營を驅逐し、小經營はおのずと兩極分解してゆく、という分解論である。第二は、そうした過程においては、競争を通じて、おのずとバランスのとれた分業關係が成長し、商品にとつての十分な市場がそこにおのずと形成されている筈だ、という均衡的分業論ないし市場論である。ところが、本書の重要な論點のうちいくつかは、これらの主張と抵觸する。第一に、雇工生産に對抗する農

民の副業的手工業生産の強韌さにつき、本書では、棉業を例として、大略次のように指摘されている。農民の家内手工業は、あらゆる農閑時間を利用し、全家の老若男女の勞働力を利用して、最も有效な分業と協業を行なうものである。生産力水準(主に生産用具)が等しいという條件下では、雇工生産は、勞賃支拂いによる生産コストの高さのため、これと競争することが困難である。又、家内手工業は、穀物を自給し得るため、雇工生産に比して、市場で被る損失に對し、抵抗力が強いのである(六七八頁)。と。第二に市場論について見れば、地方市場よりも全國的或は海外市場を重視し、「市場の狹隘性」を「萌芽」發展の重大な阻碍要因と見る本書の立場は、どちらかといえばむしろ、レーニンが批判したところのナロードニキの市場觀との親近性を感じさせる。そして、これらの論點は、「限られた市場のもとでは、資本主義萌芽は農民の家内工業とその市場を奪いあう他なかつた」(六七九頁)が「我國の小農經濟は……新しい生産様式に對して比較的大きな排斥力をもつており」(六八〇頁)、さらに「小農業と家内手工業とが牢固として結合した我國の生産構造が、我國國內市場の狹隘性を決定した」(六八四頁)といった一種循環的な因果説明により、事實上、本書が批判するところの出口なき構造論に接近しているのではあるまいか。

このような批評は、揚足とりに類するものと思われるかも知れない。しかしむしろ私は、本書が指摘する、小農經營の自然な分解の困難さ、資本主義の初期的發展における遠隔地市場の重要性、などを、重要で普遍的意義をもつ論點であると感ずるのであり、このような認識を基礎として、資本主義發展の「必然性」という重要問題の理論的再検討を行なうことこそ、中國資本主義發展の獨自の論理

の追求、ひいては「政治經濟學の中國化」につながってゆくものではあるまいかと思うのである。

資本主義發展論に關連して、階級闘争及びイデオロギーの位置づけについて附言しておきたい。かつて一九五〇年代の中國における資本主義萌芽研究を紹介・論評した田中正俊氏は、それら諸研究においては「概念・範疇の規定に不明確な點が少くない」けれども、日本の研究者が積極的に學ぶべき點として、「これらの諸研究が、資本主義萌芽を解明するにあたって、經濟構造の分析に終始せず、直接生産者の抵抗運動・『市民』階級意識の形成を具體的に敘述することにも見られるような、感性的認識（理性的認識＝理論形成の根源的前提としての）の新しい創造性を有すること」を擧げている（『中國歴史學界における『資本主義の萌芽』研究』一九五七。同氏『中國近代經濟史研究序説』東京大學出版會、一九七三、所收）。五〇年代の「萌芽」研究のこうした性格を本書と對比するとき、そこには興味深いコントラストが見られる。本書においては、例えば「資本主義萌芽」といった基礎的範疇は、熟慮を経て明確に定義されている反面、階級闘争・イデオロギーの問題は、最終章の中で「萌芽」の諸作用の一部として扱われているに過ぎない。勿論これは、これら領域に對する忽視を示すものではなく、學問的分業という觀點からの意識的限定である（總序一二頁）。しかし同時にそれは、中國資本主義の全過程を純經濟史的に敘述することも可能だ、という本書作者の認識をも示しているように思われる。

階級闘争・イデオロギーという問題は、資本主義發展過程の社會變革を擔う主體、及びそこで實現さるべき社會の性格に關するものであり、西洋史でいえば「市民革命」「市民社會」といった言葉を

中心として論じられてきた問題領域に屬するといえようが、これらの領域に關する本書作者の基本認識はどのようなものであろうか。換言すれば、毛澤東の周知の言葉を借りて「もし外國資本主義の影響がなかったとしても中國はゆっくりと資本主義社會へと發展していったらう」（『中國革命と中國共產黨』一九三九）とするなら、あり得べき中國の「近代」において出現する筈であったのは「市民革命」「市民社會」であるのか又は別のものなのか。「中國には、資本主義萌芽を反映する手工業雇傭労働者と雇主との間の階級闘争はあったが、所謂『第三身分』的性格の市民階層と彼らが發動する市民運動は存在しなかった」（七二二頁）という本書の注目すべき指摘を見れば、この領域についても或いは中國独自の性格に基づく理論が目ざされているのかも知れないが、今はその可能性を指摘するにとどめる。

以上、相當紙數を超過してしまつたが、それは私の不手際によると同時に、本書の充實した内容のしからしむるところであることを諒解していただければ幸いである。本書では、緻密な資本主義發展理論のモノサシを使って、明清期の商品經濟の發展度が詳細に計測されている。その測り方は網羅的で丁寧であり、そこで測り出された「遅れ」については周到な説明が用意されている。しかし、「政治經濟學の中國化」という生産的難題の意味するところが、もし、そのモノサシ自體の中國化、ということであるならば、將來に残された部分も少くないというべきであらう。以上、淺學の身で背のびした議論をしたために、誤解に基く妄言も多いことであらう。又、個々の事實問題に關する私の興味や意見については率ね割愛せざるを得なかつた。あわせて御寛恕を請う次第である。

一九八五年九月 北京 人民出版社
A5版 七七三頁 五・六五元

藤原利一郎著
東南アジア史の研究

八尾隆生

「序言」によれば、本書は著者の過去三十數年間に發表した東南アジア史に關する論攷から二十數篇を選び、三部に分けて收録したものである。ただ、研究の進展に伴い、なるべく原型をとどめつつ若干の訂補が行なわれている。

目次に従つて本書の内容を記せば左記の如くである。

序言

第一部 明と東南アジアの交渉

一 明初における暹羅との交渉

二 明の永樂時代における暹羅との交渉

三 明・滿刺加關係の成立と發展——初期滿刺加國史の一側面的

考察——

四 ヴェトナム黎朝前期の明との關係

五 中國資料からみた元・明時代の東南アジア華僑

第二部 ヴェトナムの歴史と華僑

一 廣南王阮氏と華僑——とくに阮氏の對華僑方針について——

二 鄭玖の廣南阮氏への歸附の年次

三 鄭玖事蹟考

四 黎朝後期鄭氏の華僑對策

五 明郷の意義及び明郷社の起源